

英語の句動詞に含まれる不変化詞の意味

石井 康毅

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

概要

英語の空間不変化詞が実際の言語使用ではどのような意味で用いられているのかを明らかにするために、空間不変化詞の語義の分布状況を、コーパスを利用して確認する。理論的に組み立てられた語義区分を、コーパスで確認できる言語使用の実態に当てはめて、不変化詞の語義の頻度を検証し、句動詞に含まれる空間不変化詞の意味の特徴を明らかにする。さらに、不変化詞が句動詞中で使われる場合には、その使われ方が他の一般の場合とは異質であり、比喩的な意味で用いられることが多いということと、句動詞の動詞句全体に対して概念メタファーが固定的に組み込まれていることが多いということを明らかにする。

1. 空間不変化詞とその意味のモデル

1.1. 空間不変化詞

空間の意味を持つ前置詞とそれと同形の副詞 (turn over の over、give up の up など) を合わせて、本稿では「空間不変化詞」(あるいは簡便のために単に「不変化詞」と呼ぶ。本稿で取り上げて詳細に論じる不変化詞は over である。不変化詞 over はこれまでに Lakoff (1987: 416-461) などの多くの先行研究においてその意味の記述が試みられてきており、また、本稿でとりわけ詳述する Tyler and Evans (2003) もその意味の全体像を記述している。なお、イギリス英語 1 億語のコーパス BNC 中での over の生起頻度は、100 万語あたり約 1,300 である。

1.2. Tyler and Evans の多義モデル

1.2.1. 一定原則に基づく多義モデル

ここでは Tyler and Evans (2003) の「一定原則に基づく多義モデル」(principled polysemy model) を概観する。Tyler and Evans は認知言語学の立場で英語の前置詞の意味の記述を試みている。Tyler and Evans の不変化詞の意味の考え方は、概略以下の通りである。

- 不変化詞の意味は、複数の個別義 (distinct sense) から成る多義構造をしているが、各個別義は、空間上の「配置的要素」(configurational element) と、その空間配置に付随する「機能的要素」(functional element) から成る。例えば in の基本義

(後述)の空間配置は、有界空間をランドマークとし、トラジェクターがその内部に存在するという抽象的な配置であり、機能的要素はそのような配置で多くの場合に付随する「内包」である¹。

- 意味の拡張は、機能的要素と発話の場面の経験的結びつきによる固定化によって得られる。すなわち、繰り返し生じる空間配置に見られる機能が大きな意味を持つようになり、その機能あるいはそれと強く結びついた配置の一部が独立した個別義になる。例えば、高さの上昇と量の増加は非常に密接に結びついている (Tyler and Evans 2003: 60)。この連想は、物が多くなればその量が増えて自然に積み上がっていったり、容器中での高さが高くなっていったりするということを思い浮かべれば容易であろう。このため、*up* や *over* などの本来位置の高さを示す語が、物量の増大も表す。この拡張の結果として不変化詞の多義的ネットワークが形成される。
- 不変化詞の個別義のうち、いくつかの条件(後述)を満たすものが基本義 (primary sense) であり、基本義の抽象化された心的表示を「プロトシーン」(proto-scene) と呼ぶ。

Tyler and Evans は、これらの個別義・基本義の間の関係について、現時点で誰もが納得できる唯一正しいモデルを示すことはできないということを認めた上で、個別義と基本義の認定基準を明示する「一定原則に基づく多義モデル」を打ち出した。

1.2.2. 個別義の認定基準

個別義の認定基準としては以下の二つを提示している (Tyler and Evans 2003: 42-45)。

1. 非空間的の意味であるか基本義のものとは異なる空間配置を含む。
2. 他の個別義と文脈からだけではその語義を導き出せない用例が存在する。

上記の二つの基準について以下説明する。

基準1については、例えば、以下の(1)と(2)には、トラジェクター(ヘリコプター・ハチドリ)がランドマーク(海・花)の上方にあるという空間配置の一貫性が見られる。

(1) The helicopter hovered *over* the ocean.

(2) The hummingbird hovered *over* the flower.

この上方という空間配置は一つの個別義のものであると想定できる(実際にはこれは後述する基本義である)。しかし、(3)と(4)に含まれる空間配置には、(1)と(2)に見られる一貫性が欠けている。

(3) Joan nailed a board *over* the hole in the ceiling.

¹ Tyler and Evans は根本的な意味観として、語の意味は語の内部に実在するものではなく、語は話者・聴者が持つ知識への手がかりに過ぎず、意味の理解においては文脈や百科的知識も総動員して行う推論がきわめて重要な役割を果たすと主張している。閉鎖類に属する前置詞で無限の空間関係を表現できるのも、この推論の働きによるという。また、全ての経験は身体化されている(人間の認知機構を通して解釈される)という意味で、意味は本質的に概念的なものであるため、(英語では不変化詞によって表現されることが多い)空間の関係も、世界において客観的に存在しているというよりは、本質的に概念的なものであるということも主張している (Tyler and Evans 2003: 50-51)。

(4) Joan nailed a board *over* the hole in the wall.

(3) ではトラジェクター (板) はランドマーク (天井の穴) よりも下にあり、(4) ではトラジェクター (板) はランドマーク (壁の穴) と平行関係にある。すなわち、(3) と (4) には、(1) と (2) にはない被覆という個別義がある可能性があるということになる。

基準 2 については、(5) の場合は上方という空間配置を持つ個別義と文脈から被覆の意味が導き出すことができる。

(5) The tablecloth is *over* the table.

つまり (5) の場合には、(1) と (2) に見られたトラジェクター (テーブルクロス) がランドマーク (テーブル) の上にあるという空間配置と、テーブルクロスは通常はテーブルよりも大きいという知識により、テーブルが覆われて見えなくなるという状況が推論可能である。しかし、上例 (3) では、その空間配置と人間の世界に関する知識を用いても、*over* に被覆の語義があることを知らないと、穴が板で覆い隠されているという理解は導き出せない。すなわち、(3) と (4) では (5) で行えたような推論はできず、*over* に被覆の語義があることを知らないと正しい解釈はできない。

したがって、*over* には上記二つの基準を満たす被覆という個別義があると認定される。

1.2.3. 基本義の認定基準

基本義の認定基準としては、以下の基準をできる限り多く満たすものが基本義であるとされる (Tyler and Evans 2003: 45-50)。

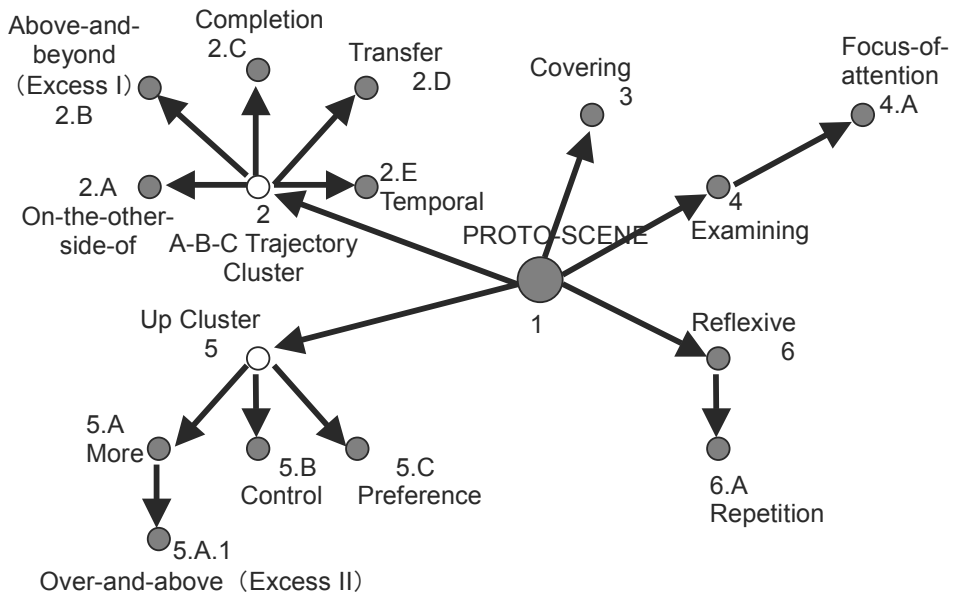
1. 通時的に最古の確認可能な意味であること。
空間関係の概念化は非常に安定しているため、ほとんどの空間不変化詞において、本来の空間配置が現在でも生きていると考えられる。そのため、最古の確認可能な意味が基本義を構成している可能性が高いと考えられる。
2. 過半数の個別義に含まれている空間配置を含んでいること。
基本義は他の個別義を導き出す基本となるものであるから、より多くの個別義に含まれる空間配置を含むものが基本義であると考えるのが妥当である。
3. 複合語・句動詞の構成要素になれること。
多くの個別義が複合的語彙単位を構成できるが、基本義でない派生的な個別義の中には複合的語彙単位を構成できないものがある。例えば、<反対側>の語義を用いて「(川などの) 反対側にある家」というような意味を表わす**overhouse* や「反対側に (ボールなどを) 蹴る」というような意味を表わす*kick *over* という複合的語彙単位は存在しない。したがって、基本義であればそれは複合的語彙単位を構成できると考えられる。
4. 対照語群形成時の意味であること。
複数の空間不変化詞が空間を相対的に分割しているため、*over-under* のように他の前置詞と対照された場合に意味するものが基本義の候補であると考えられる。
5. 多くの語義に対して橋渡しとなる文脈を考えられること。
基本義からは多くの個別義が導き出されるが、それらの基本義と直接関連する全

ての個別義に対して、その新しい語義を生み出す含意を提供する文脈を想定できるものが基本義であるはずだということである。例えば上記 (5) は基本義から被覆の個別義への橋渡しとなる含意を提供する。

1.2.4. over の意味のネットワーク

Tyler and Evans はこれまでに述べた基準に従って、改訂の余地を認めながらも多くの前置詞の意味のネットワーク構造を図1のように実際に示した。ここでは具体例として over の意味ネットワークを取り上げる (Tyler and Evans 2003: 80-106)。

図1: over の意味のネットワーク



それぞれの個別義 (影付きの丸印の部分) の用例とクラスター (白抜き丸印の部分) の簡単な説明を以下に挙げる。

1. プロトシーン (PROTO-SCENE) : The cat jumped *over* the wall. (上方空間; <具体物・抽象物>を超えて)
- 2: 高いものを超えて反対側に行く軌道の複合概念
- 2.A. 反対側 (On-the-other-side-of) : John lives *over* the hill. (明示的なランドマークの反対側あるいは話者の視点から見て何かの反対側)
- 2.B. 上方通過 (Above-and-beyond) : Your article is *over* the page limit. (到達点・目標を超えて)
- 2.C. 完了 (Completion) : The cat's jump is *over*.
- 2.D. 移転 (Transfer) : The old government handed its power *over* (to the newly elected

officials).

2.E. 時間 (Temporal) : The relationship endured *over* the years.

3. 被覆 (Covering) : The tablecloth is *over* the table. (覆って見えなくする/なる; 物理的に一面)

4. 検査 (Examining) : The mechanic looked *over* the train's undercarriage. (ランドマークに向けられた注意自体が焦点化される)

4.A. 注意の焦点 (Focus-of-attention) : The little boy cried *over* his broken toy. (~について; 注意を向けられたランドマークが焦点化される)

5: 上方移動の複合概念

5.A. より多く (More) : John is *over* fifty years of age. (~以上)

5.A.1. 多量超過 (Control) : The heavy rains caused the river to flow *over* its banks. (多すぎる・こぼれる)

5.B. 支配 (Preference) : She has a strange power *over* me. (影響力)

5.C. 優先 (Over-and-above) : I would prefer tea *over* coffee. (~よりも)

6. 再帰性 (Reflexive) : The fence fell *over*. (それ自体 (の一部) を基点とした動作²)

6.A. 反復 (Repetition) : After the false start, they started the race *over*. (繰り返し)

Tyler and Evans の議論は、不変化詞の意味の広がりをも十分な説明力でとらえており、本稿ではこのモデルを利用して不変化詞の意味の分布について検討する³。

2. 語義の使用状況の確認

本節では、1 節で取り上げた Tyler and Evans による *over* の語義区分を利用し、実際の言語使用において、語義がどのように使われているのかを確認する。英語全般における *over* の使用状況を示すものとしてコーパスのデータを利用して語義分布を確認し、句動詞における *over* の使用状況を示すものとして句動詞辞典の例文を利用して語義分布を確認する。

2.1. データの調査対象

2.1.1. コーパス

BNC から不変化詞 *over* を含む用例 100 例を無作為に取得して、一例ずつその文脈を確認しながら Tyler and Evans のモデルに従って不変化詞の語義を認定した。取得した用例が発話の断片であるなどの理由で語義が不明なものや、書き起こしの際のメタデータであるために無視したものもあり、最終的に分類できたものは 86 である。

2.3. で述べるように、Tyler and Evans の定義・説明が不十分であるがゆえに判断に迷うものもあったが、語義区分の定義を補足することでほとんどのものは分類ができた。このこ

² この例の場合、フェンスの接地部を基点としてフェンスが倒れる、すなわちフェンス最上部が弧を描くように移動する。

³ 筆者が彼らの各不変化詞の基本義と個別義のネットワークを無条件で受け入れているわけではないことには注意されたい。Tyler and Evans が示した基準のような明示した一定基準に則ったものであれば、他の多義モデルを利用してよいと考えている。

とからも、Tyler and Evans の区分会が概ね適切であると言える。

2.1.2. 句動詞データ

句動詞辞典（バーナード 2002）から over を含む句動詞の用例のうち動詞のアルファベット順に最初の 100 例（ask over, bend over, blow over, etc.）を取得した。バーナードは句動詞として選定し掲載するに至った句動詞の基準を明記していないが、掲載されているよう例から判断するに、動詞と不変化詞（副詞または前置詞）がその句動詞の意味を表現するために義務的あるいは義務でないにしても連語的に結びついていて、その不変化詞を省略することができないあるいは自然でない結合を句動詞として選定しているようである。本稿でも「句動詞」をこの定義で用いる。

句動詞中での不変化詞の使用状況を確認するためにコーパスデータを見ることも可能である。しかし本稿ではその方法を採らなかつた。それは、コーパスを対象として句動詞の用例を取得しようとする、ある動詞と不変化詞の結合が句動詞であるか否かという判断に揺れが生じてしまう可能性があるためである。例えば“take off”「離陸する」は句動詞としてよく知られているが、“take (...) as (...)”「～を～だと理解する」は判断基準によって句動詞としても、単なる動詞と前置詞が結びついたものとしても考えられる⁴。また、句動詞辞典の用例の分布とコーパスでの実際の用例の分布には頻度上の対応関係があるわけではなく、句動詞辞典の用例が実際の言語使用の実態を頻度の面では反映していないということも確かである⁵。しかし、本稿の今回の調査は数量的な比較分析を行うことではなく、英語全般と句動詞という二つの環境の質的な違いを論じることを目的としたものであり、句動詞辞典の用例とコーパスデータが頻度上必ずしも対応しないという点は本稿での議論には問題を生じるものではない。

句動詞中の不変化詞の語義の判定に当たっては、Tyler and Evans の定義・説明では判断に迷うものも多かったが、これについては 2.3. で述べる。

2.2. 分析の結果

BNC および句動詞データ中での over の語義の分布を集計した結果を示したものが表 1 である。

⁴ Macmillan Education (2005) は“take (...) as (...)”を句動詞として掲載しているが、バーナード (2002) は掲載していない。

⁵ 当然のことであるが、そもそもコーパスデータがある言語全般を完全に反映しているとは言えないということには注意が必要である。どれほど大規模なコーパスであろうと、それは言語使用の一部をそのコーパス編集の方針に従って切り出しているものに過ぎず、どのようなコーパスであろうと言語使用の完璧な縮図としてみなすことは誤っている。

表 1: over の語義の分布

語義区分	BNC 中	句動詞データ中
1.プロトシーン	19.8%	13
2.A.反対側	2.3%	0
2.B.上方通過	0%	1
2.C.完了	2.3%	1
2.D.移転	12.8%	27
2.E.時間	16.3%	2
3.被覆	0%	17
4.検査	1.2%	8
4.A.注意の焦点	11.6%	8
5.A.より多く	14.0%	0
5.A.1.多量超過	0%	5
5.B.支配	11.6%	6
5.C.優先	5.8%	0
6.再帰性	2.3%	8
6.A.反復	0%	4
合計	100%	100

BNC 中でのそれぞれの分類に相当する例を (6) に挙げる⁶。

- (6) a. 1. プロトシーン: Once Tam darted a terrified glance *over* his shoulder and saw Kim sprawled across the writing-table; ... (FU8 815)
- b. 2.A. 反対側: I wandered around, looking busy, and found Fitzormonde and Colebrooke standing *over* Mowbray's body. (K95 3413)
- c. 2.C. 完了: Slogging away at the military hospital, sickened by the pain she saw and more muddled than ever, she decided that when the war was *over* she would become a tramp. (FSP 2509)
- d. 2.D. 移転: As the FA handed *over* control of this aspect of the game to the League, it was not likely that club chairmen would encourage investigations that might damage themselves. (A6Y 275)
- e. 2.E. 時間: *Over* two years the children get free weekly training and dancewear. (AL0 118)
- f. 4. 検査: In parenthesis I should say that I am passing quickly *over* the significance of these four levels of understanding. (C8V 1497)
- g. 4.A. 注意の焦点: Concern *over* arms supplies to Middle East (HLG 2513)

⁶ イタリックは筆者による。以下の BNC・句動詞辞典からの例についても同様。

- h. 5.A. より多く: Veins extend *over* one kilometre strike length. (E9X 142)
- i. 5.B. 支配: People who have the most power *over* him -- power's the wrong word, influence -- are those who are with him every day. (E9U 1010)
- j. 5.C. 優先: The semantic constraint may take precedence *over* acoustic information. (HX9 915)
- k. 6. 再帰性: You look for the creases, if you look at this doll is lov-- beautifully creased and you can see that the creases almost match each other, you turn the baby *over* and there's lots of little creases and they match, can you all see that? (F8L 562)

<プロトシーン>が約5分の1を占める他、<時間>・<より多く>・<移転>・<注意の焦点>・<支配>の語義が多く使われ、<優先>の語義も見られるが、他はきわめて低頻度か観察されていないということが分かる。

句動詞データ (バーナード 2002) 中でのそれぞれの分類に相当する例を(7)に挙げる。

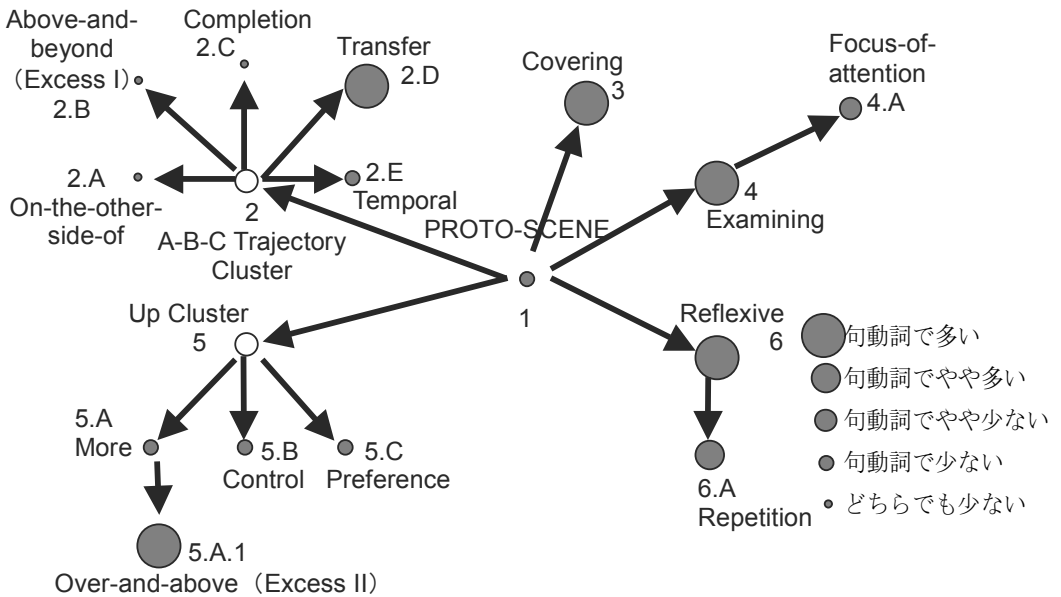
- (7)
- a. 1. プロトシーン: Our neighbour drove carelessly and ran *over* my dog. (227)
 - b. 2.B. 上方通過: It is unbelievable that you passed him *over* for promotions. (227)
 - c. 2.C. 完了: I intend to get my exams *over* with as soon as possible. (371)
 - d. 2.D. 移転: I think it is time to hand *over* to the next speaker. (442)
 - e. 2.E. 時間: We will hold *over* your point till the next meeting. (388)
 - f. 3. 被覆: Our backyard gets muddy so I want to pave it *over*. (226)
 - g. 4. 検査: Let's go *over* the main points once more. (431)
 - h. 4.A. 注意の焦点: Forget about it. It's nothing to fuss *over*. (430)
 - i. 5.A.1. 多量超過: Turn down the heat or the stew will boil *over*. (225)
 - j. 5.B. 支配: You can't hold such a small mistake *over* me for ever. (188)
 - k. 6. 再帰性: Our garden fence was blown *over* by the gale. (122)
 - l. 6.A. 反復: The teacher told me to do my term paper *over*. (402)

<移転>が約4分の1を占める他、<被覆>・<プロトシーン>が多く用いられ、<検査>・<注意の焦点>・<再帰性>・<支配>・<多量超過>・<反復>の語義も見られるが、他はきわめて低頻度か観察されていないということが分かる。

BNC 中と句動詞中という二つの異なる環境における *over* の語義の分布を比較することにより、英語全般と句動詞という二つの異なる環境では *over* の使われ方がだいぶ異なっているということが分かる。

句動詞中での *over* の語義の使われ方の傾向を BNC 中のものと比較して、図1の Tyler and Evans の *over* の語義のネットワーク図をもとに、円の大きさを示したのが図2である。

図 2: 句動詞中での over の語義の分布



句動詞中で使用される傾向が小さい語義は、<プロトシーン>・<時間>・<より多く>・<支配>・<優先>であり、これらの用例を見ると、over が動詞句から分離できない一部として用いられているのではなく、BNC のデータから取り出した (8) に見られるように、over が単体あるいは補部を伴って独立して用いられているものが多い。

- (8) a. He stopped and looked back *over* his shoulder. ... <プロトシーン> (JYB 727)
 b. If you can afford it eat out modestly *over* the stay; ... <時間> (BNL 1439)
 c. There is, however, a sharp decline to only 4 per cent remaining economically active at the age of 65 or *over* ... <より多く> (FST 1025)
 d. Control of a like kind is maintained *over* other areas such as education, housing, the police, the mentally disordered, and aspects of nationalised industry. <支配> (GU6 1626)
 e. ... age usually predominates *over* other factors such as experience and skill. <優先> (FT2 1195)

他方、句動詞中での使用が多い語義は、<移転>・<被覆>・<検査>・<多量超過>・<再帰性>であり、これらの用例中の over は、句動詞データ (バーナード 2002) から取り出した (9) に見られるように、比喩的に用いられているものが多い。

- (9) a. I am too shy to ask her *over* for a coffee. <移転> (145)
 b. We are planning to grass *over* this area. <被覆> (226)
 c. Beggars were picking *over* the mountain of rubbish. <検査> (431)
 d. Turn off the taps. The bath is just about to run *over*. <多量超過> (225)

e. I saw him bend *over* and pick up the money from the desk. <再帰性> (122)

2.3. 句動詞中の空間不変化詞の意味区分の難しさ

用例中の *over* の語義を判定するに当たって、(10) のような判断が難しい例があった。

(10) a. We were all glad to hear that you got *over* your illness. (バーナード 2002: 226)

b. His tact varnished *over* the awkwardness. (バーナード 2002: 135)

Tyler and Evans は多くの独立義が句動詞の構成要素になれると指摘している (Tyler and Evans 2003: 48) のみで、比喩的な場合の区分の議論が不十分であるため、彼らの説明だけでは上記 (10) のような場合の判断が難しい。そこで筆者は、このような場合にはそれぞれ (11) のようなもとの基本的な意味で判断することとした。

(11) a. get *over* the wall

b. You can easily get paint and paint *over* those scratches. (バーナード 2002: 226
(判定対象外のもの))

すなわち、(11a) が字義通り<プロトシーン>の語義で用いられていることから (10a) は比喩的に<プロトシーン>の語義で用いられていると判断し、(11b) が字義通り<被覆>の語義で用いられていることから、(10b) は比喩的に<被覆>の語義で用いられていると判断した。表 1 の分類をするに当たっては、このような定義の補足を行う必要があった。

3. 句動詞中に見られる比喩

2.3. で見たように、句動詞には比喩 (より詳細にはメタファー⁷) が多く見られる。

句動詞と比喩の関係を論じた先行研究の一つに Bolinger (1971) がある。Bolinger (1971: 112-115) は、動詞と不変化詞の結合を以下のように分類した。

1. first-level stereotype: 単に動詞と不変化詞を字義通りの意味で結合させたもの

2. second-level stereotype: 句動詞

2a. first-level metaphor: 句動詞のうち、不変化詞のみが比喩的であるもの (“go up” 「上に行く」に対する “load up” 「積み込む」など)

2b. second-level metaphor: 句動詞全体が比喩的であるもの (“make up a bed” 「ベッドを整える」、「rub out a mistake」 「誤りを消す」に対する “make up a face” 「顔をしかめる」、「rub out an adversary」 「敵対者を殺す」など)

3. third-level stereotype: イディオム (“put on the dog” 「気取る」など)

すなわち、この分類では句動詞には比喩が含まれているということが指摘されている。

句動詞に含まれる比喩は概念メタファーであると言えることができる。「概念メタファー」 (conceptual metaphor) とは、CONTAINER, UP-DOWN などのいくつかの「イメージ・ス

⁷ 本稿では、「メタファー」 (metaphor) を「基本的・本質的・字義通りの意味が属するドメインとは異なるドメインに属する事物を本来的に指すが、二つの事物あるいはドメイン間に認められる何らかの類似性に基づいて、言語共同体で共有される百科的知識・文脈的知識・個人の経験的知識を参照して発話・解釈がなされる言語表現やその背後にある思考のパターン」という定義で用いる。

キーマ」(image schema) と呼ばれる基本的な空間概念が現実世界の事物やその構造と組み合わせられて構成される、概念間の対応関係を述べた命題形式のメタファーのことである。例えば、(12) は CONSCIOUS IS UP; UNCONSCIOUS IS DOWN という概念メタファーを伴って理解される。

- (12) a. Wake up.
b. He fell asleep.
c. He sank into a coma.

(Lakoff and Johnson 1980: 15)

句動詞にはこのような概念メタファーが含まれていて重要な役割を果たしているというのが筆者の主張である(詳細については石井(2005)を参照)。例えば句動詞“find out”「探し出す」は、“find”「見つける」と“out”「外に」という各語の意味の他に、VISIBLE IS OUT とでも言うべき概念メタファー⁸が合わさって、句動詞全体の意味が得られる。Hampe (2000) も、動詞と不変化詞それぞれの字義通りの意味と、(多くの場合複数の)概念メタファーが組み合わさって句動詞の意味が構築されると指摘している。例えば、“face up to”「(問題などに)直面する」は PROBLEMS ARE OBSTACLES, CLOSE IS UP, ACTIVE IS UP, PURPOSEFUL ACTION IS MOTION TOWARDS A GOAL などの概念メタファーを使って理解されるという。

4. 動詞句一般における不変化詞

本節では、表層的な統語構造上は同じ“動詞+不変化詞(+名詞)”という構造(以下「V-PP 構造」)に見える様々な種類の動詞句が、実は複数のレベルで発話および解釈され得るということと、このことが不変化詞の意味の構造と密接にかかわるものであるということを論じる。

句動詞を含む、V-PP 構造の要素には、言語的要素としては、動詞(V)・不変化詞(P)・概念メタファー(CM)の三つが考えられる⁹。そして非言語的要素としては、(主語・補部に関する百科的知識を含む広い意味での)文脈が考えられる。そうすると、このV-PPの解釈のあり方の可能性としては、以下の三種のパターンが考えられる。

1. V+P: 概念メタファーが用いられない単純な表現。
2. V+[P+CM]: 概念メタファーに基づく不変化詞の個別義は独立したものとしてまとめ扱い([P+CM])、これを動詞と合わせて理解する。
3. [V+P+CM]: V-PP 全体に特定の概念メタファーが組み込まれている。

⁸ 概念メタファーは予め決まった一群があり、大多数の研究者がそれに同意しているというようなものではないため、ある特定の文の背後にある概念メタファーは事態の見方によって様々なものを想定することが可能な場合が多い。例えば“find out”に含まれる概念メタファーとして、“sell out”「売り切る」に見られるような SUCCESSFULLY COMPLETING AN ACTIVITY IS OUT とでも言うべき概念メタファーを想定することも可能である。

⁹ 動詞および不変化詞(この場合は副詞を除く前置詞)の補部もV-PP構造の構成要素だが、ここではこれらは捨象し、動詞と不変化詞と概念メタファーに焦点を絞る。

この分類の詳細と、分類を支持するデータについては稿を改めて論じる (Ishii in press) が、以下それぞれのパターンの概略と取得した用例に見られる実例を挙げる。

4.1. パターン (1) : V+P

このパターンは、動詞と、メタファーを含まない意味的に透明な不変化詞の自由結合によるものということになる。このパターンで解釈されると考えられるものには (13) ~ (14) のような例がある。

(13) Peter turned, one arm casually draped *over* Sarella's shoulders, and greeted Marc with a cheerful wave. (JXU 3164, BNC)

(14) The only way to cross *over* this river is by ferry. (バーナード 2002: 135)

(14) の *cross over* は「転身する」といった比喩的な意味にもなりうるが、ここでは字義通り横断するという意味で使われている。これは句動詞辞典からの用例であるが、意味的に不透明な結合を指すいわゆる「句動詞」ではない。

4.2. パターン (2) : V+[P+CM]

このパターンは、動詞と[概念メタファーを含む不変化詞の個別義]が結合したものであり、通常の動詞句や意味的な透明性の高い句動詞の多くに見られる構造である。このパターンで解釈されると考えられるものには (15) のような例がある。

(15) ... if you agree to buy something *over* the phone you've still formed a contract with the supplier. (FT8 637, BNC)

(15) では、情報伝達経路である電話 (回線) が、物とみなされる情報をやり取りする道とみなされており、TELEPHONE LINE IS A PATH とでも言うべき概念メタファーを背後に伴って *over* が使われていると考えられる¹⁰。

4.3. パターン (3) : [V+P+CM]

このパターンは、動詞句全体に特定の概念メタファーが組み込まれており、意味的な透明性が低い多くの句動詞に見られる構造である。この、動詞句全体に特定の概念メタファーが組み込まれているということが、不変化詞の語義認定を難しくしている最大の理由であると考えられる。ただし通常はこの中にも概念メタファーを含む個別義 ([P+CM]) が認められる。それでもなおこのパターンがパターン (2) の V+[P+CM] と違う点は、動詞句全体が文脈から独立した、項目としての意味を持つという点である。多くの句動詞は文脈なしでも項目の意味が分かる独立性を持ち、パターン (2) の V+[P+CM] のように動詞と不変化詞 (と概念メタファー)、そして文脈を与えられてそこから意味が構築されるわけではないからである。このパターンで解釈されると考えられるものには (16) ~ (17) のような

¹⁰ 2.3. で述べたように Tyler and Evans のモデルの枠内では比喩的な語義の扱いが難しく、(15) の *over* は比喩のもとなる意味で語義の判定を行ったため、<プロトシーン>と判断した。しかし筆者は、概念メタファーを含む不変化詞の語義は、中核語義 (Tyler and Evans が言うところの<プロトシーン>) から拡張された「語彙の意味として内在化されたメタファー」であり、中核語義自体ではないと考えている (石井 (2005, 2006) を参照)。

例がある。

(16) He wanted to buy me *over*, but he didn't offer enough. (バーナード 2002: 207)

(17) I'll run *over* the main parts of the ceremony with you. (バーナード 2002: 431)

(16) については、buy over で「買取する」という独立した意味を持っている¹¹が、立場の境界が超えるべき障害物とみなされており、TWO DIFFERENT POSITIONS ARE DIVIDED BY A BARRIER TO GET OVER とでも言うべき概念メタファーが背後にある<移転>の語義で over が使われていると考えられる。(17) については、run over で「確認・復習する」という独立した意味を持っているが、BEING OVER SOMETHING IS BEING ABLE TO OBSERVE IT とでも言うべき概念メタファーが背後にある<検査>の語義で over が使われていると考えられる。

5. 結論と今後の課題

コーパスを用いて不変化詞 *over* の語義の分布を調査することで二つのことを明らかにした。第一点は、空間不変化詞の語義の分布は、句動詞中で用いられる場合には、英語全般における用いられ方とはかなり異なるということである。第二点は、句動詞中の空間不変化詞は、句動詞以外の場合と比べて、比喩的に用いられることが多く、動詞句全体に対して概念メタファーが組み込まれている場合も多いということである。

今後の課題としては、第一にコーパスを利用した句動詞の実例の調査が挙げられる。英語全般の使用実態を反映するものとしてのコーパスから句動詞の用例も取得することによって数量的な比較分析も可能になるからである。ただし、その前提として妥当で明確な「句動詞」の選別基準も不可欠であり、ある動詞句が句動詞であるか否かを判別する明確な基準について十分に検討する必要がある。第二に他の不変化詞を対象とした調査が挙げられる。筆者は不変化詞 *in* を対象として本稿と同様にコーパスと句動詞を比較する予備的な調査を行い、句動詞の場合の使用語義の比喩性の高さを確認しているが、Tyler and Evans の「一定原則に基づく多義モデル」で完全に全体像が記述されている不変化詞がほとんどないため、よりどころとする語義の区分がなく、本稿同様の語義の分布の確認が難しいという問題がある。「一定原則に基づく多義モデル」が現在考慮していない頻度や比喩も考慮したモデルの構築を行いつつ、他の不変化詞の調査分析を行い、なぜ句動詞にはメタファーが多く含まれているのか、そしてこのことが英語全体の中でどのような役割を果たしているのかということをより詳細に検討していきたい。

¹¹ (15) の“buy (...) over (...)”が文脈から独立した意味を持たないということと対照されたい。

引用・参考文献

- Bolinger, D. 1971. *The Phrasal Verb in English*. Harvard University Press.
- Hampe, B. 2000. "Facing up to the Meaning of 'face up to': A Cognitive Semantico-Pragmatic Analysis of an English Verb-Particle Construction." In Foolen, A. and F. V. D. Leek, eds., *Constructions in Cognitive Linguistics: Selected Papers from the Fifth International Cognitive Linguistics Conference, Amsterdam, 1997*, John Benjamins, pp. 81-101.
- Ishii, Y. in press. "On the Semantic Structure of English Spatial Particles Involving Metaphors." In *Linguistic Informatics VI. The 21st Century COE Program "Usage-Based Linguistic Informatics"*, Tokyo University of Foreign Studies.
- Lakoff, G. 1987. *Woman, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.
- Macmillan Education. *Macmillan Phrasal Verbs Plus*. Macmillan Education, 2005.
- Tyler, A. and V. Evans. 2003. *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge University Press.
- 石井康毅. 2005. 「英語の不変化詞の意味と語彙的意味として内在化されたメタファー」. 敦賀陽一郎・高垣敏博・浦田和幸(編) 『言語情報学研究報告 7 コーパス言語学における語彙と文法』 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」, pp. 497-520.
- 石井康毅. 2006. 「英語の不変化詞に見られる意味の階層性—メタファーの観点より—」. 川口裕司・亀山郁夫・富盛伸夫・高垣敏博(編) 『言語情報学研究報告 9 シンポジウム、講演会、研究報告』 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」, pp. 186-217.
- クリストファ・バーナード. 2002. 『英語句動詞文例辞典』 研究社.

コーパス

BNC: the Second Edition of the British National Corpus.